第1回デザイン会議｜議事概要

走りながら、育てる。

01 印西市視察レポート “既存価値の編集が重要”

説明概要

・印西市を実際に訪れ、「歴史ある市街地＋ニュータウン＋自然環境」が近接して共存している都市の構造とローカルプレイヤーの存在に、これからの印西らしい暮らしの可能性を感じた。

・印西市はニュータウン、旧市街地、住宅地、自然環境エリア、産業集積エリアなど多様な地域が共存する都市構造を有している。それぞれのエリアが異なる課題と資源を持っており、エリアごとの特性を踏まえながら将来像を検討していくことが重要である。

委員からの意見

・印西市は新たな計画をつくるというよりも、既に存在する多様なポテンシャルを編集し、可視化していくことが重要であると感じた。（馬場氏）

・市としても「こういうまちを目指したい」と感じられるものであり、職員の間でも共感を得られる内容である。（市長）

02 ブランディング “ストーリー性と導線設計が大切”

説明概要

・本プロジェクトのブランディングは「移住・定住の促進」が最終ゴールと位置付け。

・市ホームページ全面リニューアルや移住・定住ポータルサイトの整備について、コンセプトロゴを活用しながら進める。発信対象エリアや情報発信の方向性について議論していきたい。

委員からの意見

・従来型とは異なる新しい未来都市の姿が一つのストーリーとして整理されており、印西市の目指す方向性に納得感がある。（馬場氏）

・都市と自然をつなぐ価値や新しい暮らしのあり方を発信しながら、移住・定住へつなげる動線設計が重要である。（市長）

03 エリアビジョン “プロジェクトを受け止める器として期待する”

説明概要

・エリアビジョンは、各エリアが持つ特色や魅力を生かした将来像を示し、分野横断的なまちづくりの指針として、現在進行している各プロジェクトと連動を図るもの。

・今後は委員からの意見や助言をいただきながら地域分析を進め、エリアビジョンのたたき台を作成していく予定である。

委員からの意見

・緩やかなビジョンが進行中のプロジェクトを受け止める器となることで、単発の取組ではなく継続的な行政施策として展開できるようになる。予算措置まで連動する形になると良い。（後藤氏）

・従来の計画主導型ではなく、具体的なプロジェクトを先行させながらデータ分析や検証を並行して行い、走りながら調整を重ねていくアジャイル型の都市政策が印西市の特徴である。（馬場氏）

04 木下地区（仮称「木下構想」） “憧れの風景となれるポテンシャル”

説明概要

・対象は「にぎわい広場」＋「南口商店街」

・公民連携手法で公民館の移転検討を含むにぎわい広場の整備と商店街の空き店舗活用（開業支援）を同時に推進。

委員からの意見

・木下地区は高いポテンシャルを有しており、新しい未来都市の「憧れ」となる風景を創出できる可能性がある。（馬場氏）

・ニュータウンから木下地区へ人を呼び込み、地域プレーヤーや新たな事業者を増やしていく視点が重要である。（福田氏）

05 牧の原公園 “子育て×ウェルビーイングを体現できる場所”

説明概要

・公園は「子育て世代が多い」エリアで、多世代利用（遊び・運動・学び・交流）がテーマ。

・ゾーニング案としては（①見晴らし丘にカフェ、②屋根と建物の連携重視、③駅接続動線重視）の3つ。

委員からの意見

・牧の原公園は、印西市が目指すウェルビーイングを象徴し、ニュータウンエリア住民の日常利用の拠点となる重要な空間であることから、公園単体ではなくまちの価値向上につながる視点で将来像を描く必要がある。（馬場氏）

・牧の原エリアは移住を検討する「ウェルビーイングペアレンツ」にとって有力な候補地であり、「子育てとウェルビーイング」を軸に施設や空間づくりを進めるべき。また、屋根のある半屋外空間など、子育て世帯が快適に過ごせる環境整備が重要。（小林氏）

06 会議の総括

都市と自然が近接する印西市ならではの強みを生かし、それぞれの魅力を高めながら相互につなげていくというビジョン・価値観について、参加者間で認識を共有していくことが大切。

大きな方向性を描きつつ、実践を重ねながら検証・改善を行い、その結果をビジョンへ反映していく「動的平衡」の考え方が大切。既存の価値を尊重しながら新たな価値創出を図ることが重要。

里山エリア、木下地区、牧の原公園等の魅力づくりにおいて、担い手・投資・運営手法を含めた持続可能な仕組みづくりを進めるとともに、牧の原公園のゾーニング整理やマーケットサウンディングに向けた検討を優先的に進める。